

平成22年6月1日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19500655
 研究課題名（和文） 教材開発を通じた子どもの創造性を育てる表現教育のあり方に関する体系的な研究
 研究課題名（英文） A systematic study of expressive education for fostering children's creativity through the development of teaching materials
 研究代表者
 矢野 真（YANO MAKOTO）
 京都女子大学・発達教育学部・准教授
 研究者番号：00369472

研究成果の概要（和文）：保育・教育現場における「造形」と「音楽」を融合した教材開発を通して、子どもの創造性を育む保育・教育内容の提唱と実践研究を行った。「おりがみうた」などのオリジナルの教材研究を通して、これからの表現教育における保育現場と保育者養成機関が連携・意見交換を行うことにより、相互の共通理解による領域「表現」のあり方を検討していく必要性があることを導き出すことができた。

研究成果の概要（英文）：We concluded that it is necessary for nursery teachers and teacher training colleges to exchange opinions and cooperate to consider expressive education on a mutual understanding through the development of teaching materials by integrating art and music education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：保育と福祉

1. 研究開始当初の背景

(1) 課題意識をもつに至った総合的背景

今日、子どもの表現教育における「造形」と「音楽」は、指導要領によって領域「表現」として並列したかたちで扱われているにもかかわらず、保育者・教員養成課程においては、

造形は造形、音楽は音楽という独立した考えによって講義が行われているというのが現状である。しかし、保育・教育の現場における現実には、「造形」と「音楽」はそれぞれ単独で行われるよりも、子どもの生活と相互に関連し合いながら行われていることが多くみられる。

このような状況を踏まえた上で、保育者・教員養成課程における領域「表現」の講義のあり方を再考し、保育・教育の現場における状況や要望にそった講義内容・教材を検討していく必要がある。また、同時に保育・教育の現場が本当に求めている人材養成のためには、何が必要なかを保育・教育の現場から研究の場へとボトムアップしていく必要がある。

一方、社会的な動きとして、平成 18 年 11 月には、いわゆる幼保一元化の流れの中で、保育機能と教育機能を拡充させた「認定こども園」という、より充実した福祉・教育の現場作りを目指した施設が認可され、全国的に本格的実施を目指している。しかしまだ現場は、保育や教育内容といったソフト面に関わる部分、そして調理施設などに関するハード面においては模索状態である。「認定こども園」の特徴である、保育の時間と教育の時間が境目なくつながれば、自ずとそこには、今までよりも一層の保育・教育内容の拡充と人的資源の教育及び再教育(免許・資格の取得)が必要となってくるのは喫急の課題である。

(2)「表現教育」の現状把握と課題意識

現在の保育・教育の現場において表現教育の重要性を指摘する園が増え、専門的な技術指導を大学や研究所などの機関に依頼し、保育者のための研修会が多く設けられるようになった。しかし、短期間研修のため、造形は造形、音楽は音楽と独立した考えによる、単なる知識・技術指導にとどまってしまう可能性が高いことを考えると、現在の大学における講義と何ら変わりがないのではないかということも否定できない。結果、研修を受けた保育者は、知識注入主義的な「させる指導」を研修の中で再学習し、技能の伝達や修得を中心に考えてしまうことも考えられる。そして研修を受けたことだけで保育者の責を取れたような錯覚を起しかねない。

本来保育者は、継続的に「造形」や「音楽」の知識・技能を修得することの必要性を認識し、領域表現としてどのように両者を関連づけていくかを考えていく必要がある。そして子どもの生活や遊びを通して、子ども一人ひとりがどのように感じたり、何に興味や関心、期待感を持っているかということを見極める力が必要となるのではないだろうか。これらのことから、一層の保育・教育内容の拡充の研究と人材育成の視点に立った提言及び実践が必要であると考えられる。つまり、現実問題としての保育者への再教育と、保育・教員養成課程において、子どもたちのためにどのような経験や学びが必要なかをもう一度捉えなおし、今までの保育・教育における領域表現を体系的に再構築していく必要があるという、課題意識をもつ

ている。

(3)これまでの研究成果とその内容

以上の課題意識を持ちながら、平成 16・17 年度は、日本宝くじ協会及び鎌倉女子大学学術研究所助成金によって、子どもの新たな遊び場の提唱と実践を、横浜こどもの国における「おとぎの広場」において展開し、その実践を通じた共同研究を行った。平成 18 年度は横浜市栄区と鎌倉女子大学との連携事業による造形ワークショップの実践を通して、行政と地域住民、大学との連携による子育て支援について検討を行ってきた。実践の中では、幼児と親とのコミュニケーションが促進され、また、大学の指導者、学生と親子の間にも様々なコミュニケーションがみられ、造形ワークショップが子育て支援に有効であることが示唆された。

また、大学における講義内容では、保育内容研究において「うたの絵本」や「おとのかたち」など、領域「表現」として「造形」と「音楽」を関連づけた内容の展開を通して、今までの保育・教員養成課程における領域「表現」を体系的に再構築していく必要があるのではないかと課題意識をもつに至った。

2. 研究の目的

子ども自身が主体的に行動し、人間らしく生きる姿を支援し、伸ばしていくことが表現教育の姿である。表現教育の子どもの発達に及ぼす影響は、人間形成に必要である知覚、思考、情緒、運動など諸機能の発達を促し、統合させることによって可能となるものであり、子どもの発達に大きく関わる重要な活動である。子どもの発達の視点、そして人間形成という社会的な視点からをも包含した内容を考慮した上で、実際の保育・教育の現場における「造形」と「音楽」とを融合した教材開発を通して、子どもの創造性を育む保育・教育内容の提唱と実践こそが本研究の目的である。

そこで、まず「造形」と「音楽」を融合した教材開発と試行(計画・実践・評価)を第一の目的とした。そのため研究 1 年目は認定こども園と保育所・幼稚園における表現教育の現状調査を行った。そして、2 年目にワークショップなどの提案を行いながら教材開発の検討と試行を行った。3 年目では教材開発のまとめを行うことにより、新たな表現教育の可能性を導くとともに、保育・教員養成課程の学生を対象とした研究内容のフィードバックを行い、現職者の再教育(リカレント)とともに社会還元を行うことを第二の目的とした。

研究の具体的な達成目標は以下の通りである。

- ①表現教育としての教材の現状調査(全国 35ヶ所のモデル事業を行ってきた認定こども園、保育所、幼稚園における表現教育の問題点の抽出と検討)
- ②「造形」と「音楽」を融合した教材開発(検討及び試行、評価、フィードバック)
- ③ワークショップなどによる提案(検討及び試行、評価、フィードバック)
- ④表現教育としての教材集作成(学生に対するフィードバック、社会還元)

3. 研究の方法

本研究を遂行するにあたり、まずモデルケーススタートをしている全国 35ヶ所の認定こども園の現状調査(表現教育の捉え方とその実践活動)を調べた。同時に、保育所・幼稚園において特徴ある表現教育の実践活動を調査することにより、両者の表現教育の実施内容や「造形」と「音楽」を融合した教材の現状を比較検討した。そのため、全国にある認定こども園と保育所・幼稚園を訪れ、調査を行った。

その調査をもとに、保育・教育の現場においてどのようなかたちで「造形」と「音楽」が表現教育として実施されているのか。また、「造形」と「音楽」の融合という点での問題点を具体的に検討した。これらの調査結果、及び現在までの調査を2年目に向けた具体的なワークショップによる提案を行いながら教材開発の準備に入った。

平成 20 年度は前年度の現状調査をフィードバックした「造形」と「音楽」のワークショップを検討し、その教材研究を通じて実践を行った。その実践には、実際に参加した受講生を対象にアンケート調査を実施した。アンケート調査は質問紙法にて行った。そのアンケート結果と教材研究を通じた実践結果をもとに、表現教育教材集の内容検討を行った。

平成 21 年度は、前年度のアンケート結果とワークショップの実践結果をもとに原稿作成を行い、表現全体を体系的にまとめた。

4. 研究成果

(1)表現教育としての教材の現状調査

平成 19 年度、全国 35ヶ所のモデル事業を行ってきた認定こども園、保育所、幼稚園における表現教育の現状を把握するために、①総合施設モデル事業の実施について②園内で行われている表現について、アンケート調査を行った。

①では、施設の実施類型による比較、子どもの人数による比較、幼稚園教育と保育所保育との実施における規定因について調査した結果、幼保連携型施設での教育・保育内容や時間配分の困難を感じていること、園全体の

カリキュラムないしは教育・保育体制の充実が、幼稚園教育要領と保育所保育指針の両者の目標達成に寄与していることが明らかとなった。

②の園内で行われている表現に関する各質問項目の得点(はい-5、いいえ-1)の平均値を表 1 に示す。なお、各設問に対して未解答であったものは、分析ごとに除外した。

項目	m	(SD)
a. 日々の実践において、造形は大切だと思いますか	4.71	(0.55)
b. 実際の保育において、造形はかなりの割合を占めていますか	3.58	(0.97)
c. 園内で独自の造形に関する教材やアイデアを実践していますか	3.83	(1.17)
d. 造形において、絵を描くことよりも工作を作ることが多いですか	3.25	(0.85)
e. 日々の実践において、音楽は大切だと思いますか	4.79	(0.41)
f. 実際の保育において、音楽はかなりの割合を占めていますか	3.75	(1.03)
g. 園内での独自の音楽に関する教材やアイデア実践していますか	3.58	(1.06)
h. 音楽において、器楽活動よりも歌唱活動の方が多くですか	3.88	(0.95)
i. 「表現」(造形・音楽)を扱う際、子どもにどのように援助したらよいか、難しさを感じることはありませんか	3.38	(1.21)
j. 楽器・描画材料・用具などを扱う際、難しさを感じることはありませんか	3.17	(1.11)
k. 「表現」の時間配分にゆとりをもって取り組むことができますか	3.58	(0.78)
l. 「表現」によって子どもに自信をもたせるように、励ます、褒める、共感することに難しさを感じますか	2.92	(1.02)
m. 5領域の「表現」を取り上げた際、造形と音楽は別々に行うべきだと思いますか	2.63	(1.31)
n. 造形と音楽を一つの「表現」として教材研究や実践に役立てたことがありますか	3.42	(1.47)

表 1. 園内で行われている表現(造形・音楽)

設定値が比較的高かった項目(平均値 4.0 以上)は、「a. 日々の実践において、造形は大切だと思いますか(m=4.71)」、「e. 日々の実践において、音楽は大切だと思いますか(m=4.79)」であり、一方、設定値が比較的低かった項目(平均値 3.0 未満)は、「l. 「表現」によって子どもに自信をもたせるように、励ます、褒める、共感することに難しさを感じますか(m=2.92)」、「m. 5 領域の「表現」を取り上げた際、造形と音楽は別々に行うべきだと思いますか(m=2.63)」であった。

また、①の調査と合わせ、幼保連携型と幼

稚園実施型との間で施設の実施類型による比較、子どもの人数による比較についてt検定を用いて行った(保育所実施型は少数のため、比較には含めなかった)。その結果、「表現」の時間配分にゆとりをもって取り組むことができているか」という問いに対し、幼保連携型における得点が幼稚園実施型におけるそれよりも有意に低く($t(16)=2.63, p<.05$)、「表現によって子どもに自信を持たせるように、励ます、褒める、共感することの難しさを感じますか」においてはその傾向がみられた($t(16)=1.82, p<.10$)。この結果から、幼保連携型の施設においては、表現活動における時間配分や子どもへの働きかけに対して難しさを感じていることが伺われた。さらに、施設に在籍する子どもの人数による平均値の比較を行った結果、「実際の保育において、造形はかなりの割合を占めていますか($F(2,16)=4.31, p<.05$)」、「園内で独自の造形に関する教材やアイデアを実践していますか($F(2,16)=5.21, p<.05$)」、「表現を扱う際、子どもにどのように援助したらよいか、難しさを感じることはありませんか($F(2,16)=3.13, p<.05$)」において主効果が有意であり、tukey法による下位検定の結果、いずれの項目においても151名以上の施設での得点がそれ以外におけるそれよりも高かった。この結果から、子どもの人数の多い施設においては造形活動を盛んに行っており、その一方で活動における子どもの援助について難しさを感じていることが明らかとなった。

(2) 「造形」と「音楽」を融合した教材開発

以上の結果、「表現活動における時間配分や子どもへの働きかけ」をどのように克服していくかを考慮して教材研究を行い、「造形」と「音楽」を融合した教材を提示した。特に、日常の保育に取り組む保育者が時間と明確な教材の提示ができるような教材の提示が必要である。そこで、新たな提案による教材をつくる必要として、2008年度に『幼稚園・保育園の毎日のおりがみ』、2009年度に『保育園・幼稚園の絵画あそび完全マニュアル』(ともに成美堂出版)と連携して「おりがみうた」を発表した。「おりがみうた」は誰でも楽しむことができるように、日本古来の伝統的な遊びのおりがみを歌に合わせて折るものである。おりがみは細かい部分に集中して指を使うことや、1枚の紙から別のかたちをつくり出すということが、子どもたちの成長にプラスになり、このプロセスを通して子どもの創造力や知恵を膨らませることに適した教材と考えた。

この新たな教材の提案について、次に実践を中心とした「おととかたち」をテーマに取り上げたワークショップで検証を行うこと

とした。

(3) ワークショップによる提案

「おととかたち」をテーマとして、「おりがみうた」を取り入れたワークショップを通して、「造形」と「音楽」を融合した教材に関する検証を行った。また、保育・教員養成課程の学生を対象とした研究内容のフィードバックについても検証を行った。

対象期間は2008年5月～12月の月1回、対象は横浜市栄区在住の2～6歳児とその親で1回のワークショップにつき12組程度(表2)で行った。時間配分を考慮するため難しい作品とならないよう工夫し、20分～30分以内でできる教材設定を行い、テーマにあわせて共同制作1点、個人制作2点(うち1点は「おりがみうた」を取り入れた作品)とした。

	テーマ	人数(子ども)
第1回	春のかたち、春のおと!	31人(17人)
第2回	光のかたち、光のおと!	26人(14人)
第3回	光のかたち、光のおと! II	26人(14人)
第4回	夏のかたち、夏のおと!	25人(14人)
第5回	いきもののかたち・おと!	30人(16人)
第6回	秋のかたち、秋のおと!	22人(12人)
第7回	いろんなかたち、いろんなおと!	30人(17人)
第8回	冬のかたち、冬のおと!	12人(6人)

表2. ワークショップ内容

子どものワークショップ中の様子について、参加した保護者92名に対し実践後に質問紙を実施(有効回答数79)した。各質問項目について(はい-5、いいえ-1)の5件法で解答を求めた。その結果、「a.「おととかたち」というテーマでの作品づくりに難しさを感じますか($m=2.44$)」、「b.「おととかたち」というテーマでの作品づくりを楽しむことができましたか($m=4.45$)」、「c.「おりがみうた」のような音楽と造形とを合わせた教材は、もっと増やしてほしいと思いますか($m=4.19$)」、「d.音楽は音楽、造形は造形と切り離して講座を行なうべきであると思いますか($m=1.86$)」という結果であった。

この結果から、歌に合わせておりがみをおることや、音を具体的なかたにするなど、「おととかたち」を取り上げたワークショップが意義のあるものと考えられる。特に、b($m=4.45$)とc($m=4.19$)は得点が高く、子どもが活動に満足していると保護者が感じる要因が示されているといえる。そして、「おりがみうた」という新しい教材の提案が有効であるということが明らかとなった。

保護者の自由記述にも、以下のような意見がみられた。

「歌いながらつくることは、子どもにとって楽しい企画である」、「つくりながら音を出して遊べることは自然な流れでよいと思う」、

「前回、自宅に帰って、歌いながら何度もおりがみを折る様子がみられた」、「歌も覚えやすく、活動がしやすかった」、「活動に発展性がある」、「マンネリ化したおうち遊びに広がり期待できる」、「簡単な折りなので、子どもが積極的に活動していることに成長を感じた」など、子どもが楽しく活動するために有意義な教材であったことが伺える。

また、参加した学生の意識の変化もみられた。以下は、参加した学生の自由記述による意見である。

「自分も参加者の側になって、どうやらわかりやすく、どうしたらわかりにくくなってしまふのかなど、視点を切り替えながら段取りを考えていくことが大切だと思った」、「子どもたちに歌うということをもう少し意識してもらえような導入を考え、おりがみを折るといふ流れをつくれればよかった」、「曲調の明るさが足りず中途半端な明るさの中で折るので、不完全燃焼な感じがする。もう少し明るい調で歌えるのであれば、左手の音を改善した方がよい」など、こうした「おりがみうた」の教材を通して、自分たちが保育者としての立場から改善点を見つけ、積極性をもって次回へフィードバックしていこうとする前向きな姿勢がみられた。

(4) 保育現場へのフィードバック

ワークショップの結果を踏まえ、200の幼稚園・保育園に表現に関する質問紙調査、および「おりがみうた」の実践依頼を行い、実践後に質問紙調査を実施した(有効回答 129)。

まず、(1)の全国35ヶ所のモデル事業を行ってきた認定こども園、保育所、幼稚園と同様に、園で行われている表現に関する質問紙調査を行ったところ(項目は表1参照)、園内で行われている表現に関する各質問項目について、「a. (m=4.85)」、「b. (m=3.21)」、「c. (m=2.86)」、「d. (m=2.79)」、「e. (m=4.85)」、「f. (m=3.43)」、「g. (m=2.87)」、「h. (m=3.99)」、「i. (m=4.34)」、「j. (m=3.92)」、「k. (m=2.66)」、「l. (m=3.53)」、「m. (m=2.53)」、「n. (m=2.65)」という結果が得られた。表1と比較すると、cとgとnの3項目についてはかなり平均値を下回るといった結果となったが、それ以外の項目については、ほぼ同様の結果となった。

「おりがみうた」の実践の感想に関する質問項目(表3参照)について、分析対象として以下に示す。

表3に示す質問項目について、その賛否を「はい(5)―いいえ(1)」の5件法で回答を求め、得点化した。その結果、いずれの項目においても回答者の半数以上が5または4を評定していた。

得点の平均値を保育経験年数により比較した(表3)。その結果、項目cでは、保育経験5年未満および5～10年の保育者は10年

以上の保育者に比べ有意に得点が高かった。つまり、保育経験が短い保育者ほど「おりがみうた」に対して難しさを感じていると考えられる。また、項目dおよびeでは、保育経験5年未満の保育者は10年以上の保育者に比べ有意に得点が高かった。つまり、保育経験が短い保育者ほど「おりがみうた」を有効かつ必要な教材であると感じていると考えられる。

項目		m	(SD)
a. 「おりがみうた」を理解し、子どもとの作品づくりを楽しむことができましたか	①	3.90	(0.85)
	②	3.93	(0.73)
	③	3.83	(0.95)
	④	3.76	(0.98)
b. 「おりがみうた」を使っての作品づくりに保育者側からの難しさを感じますか	①	4.25	(0.72)
	②	4.12	(0.76)
	③	3.93	(0.98)
	④	3.00	(1.17)
c. 「おりがみうた」は、子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか	①	3.55	(0.69)
	②	3.75	(0.78)
	③	3.67	(0.76)
	④	3.38	(1.04)
d. 造形と音楽を一つの「表現」として考えたとき、「おりがみうた」は有効な教材であると思いますか	①	4.05	(0.69)
	②	4.00	(0.82)
	③	4.07	(0.79)
	④	3.54	(0.96)
e. 「おりがみうた」のような音楽と造形をあわせた教材は、もっと増やしてほしいと思いますか	①	3.95	(0.83)
	②	4.10	(0.74)
	③	3.93	(0.91)
	④	3.46	(1.04)

表3. 「おりがみうた」に関して(動続年数が①:3年未満、②:3～5年未満、③:5～10年未満、④:10年以上)

今回の「おりがみうた」の実践依頼後、3園の保育者から貴重な意見をいただいた。ここでは、実践依頼後から子どもたちに「おりがみうた」を導入し、子どもたちに定着しつつあるというものであった。これら3園ともに共通していることは、歌を覚えてから折らなくてはいけなくなる点が難しいという点に着目し、できるだけなじみ深い歌にあわせておりがみを折るといふことであり、既存の歌に歌詞をつけて「おりがみうた」を展開することである。このほうが子どもたちに身近に、しかも手際よく行うことが可能であるという結果が得られるようであった。また、今回の実践後、おりがみ遊びが日常的に行われるようになり、ただ単にうたに合わせておりがみを折るだけでは子どもの創造性を発展させることはできないと考え、出来たおりがみをさらに作品(壁面装飾にする、出来たおりがみに自由に絵を描いて、作品に個性を出す、作ったものを使って遊ぶ)へと展開していくきっかけとなったという結果も得られた。さらに、子ども1人でおりがみうたをするのは困難なため、参観日など一人ひとりの子どもに保育者が一緒に行うことも指摘さ

れた。こうした保育現場の意見は重要であり、保育現場からの「おりがみうた」の改善点①歌詞を聴いて画像が思い浮かぶこと、②折るリズム感と歌のリズム感が合えば、子どもたちにも折りやすくなること、③既存の歌を替え歌にして「おりがみうた」をつくるほうが子どもたちになじみやすいこと、といったことが明らかとなり、今後いっそうの保育現場との連携を通して検討することの重要性が導きだされた。

(5)まとめ

本研究を通して、これからの保育・教育の現場の中で、どのように表現教育を捉えていくべきかという方策の提言とともに、表現教育を通してどのように子どもとその取り巻く環境に働きかけることの必要性を導きだすかということを明らかとしてきた。特に、以下の点について、今後の表現教育のあり方の重要性が明らかとなった。

①「造形」と「音楽」を切り離して考えるだけではなく、保育現場や保育者養成機関では両者を関連づけた教材を考えていく必要がある。特に、保育現場では日々の活動の流れに沿って表現教育を捉える必要があり、保育者養成機関においては、領域「表現」としての保育内容等の授業を展開していく必要がある。

②保育現場と保育者養成機関とが連携することにより、今後の表現教育のあり方や教材開発に取り組んでいく必要がある。そのためには、新たな領域「表現」のあり方について、研究者間や保育者養成機関の立場からの一方的な提示ではなく、保育現場との意見交換を行い、相互の共通理解による領域「表現」のあり方を検討していく必要がある。

これら研究結果は、これからの保育・教員養成課程で学ぶ学生や現職者の再教育(リカレント)への教育的資源として活用されることが考えられる。また、表現教育の再検討と体系的再構築によって、今後の新たな表現教育への応用としての可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計4件)

- ①矢野真、教材開発を通じた表現教育のあり方に関する実践研究、美術科教育学会、2008年3月28日、群馬大学荒牧キャンパス
- ②矢野真・吉津晶子、教材開発を通じた表現教育のあり方に関する実践研究Ⅱ、日本保育学会、2009年5月16日、千葉大学
- ③矢野真・吉津晶子・田爪宏二、教材開発を通じた表現教育のあり方に関する実践研究

Ⅲ、全国保育士養成協議会、2009年9月11日、東北福祉大学

- ④矢野真・吉津晶子、領域「表現」における教材開発を通じた「おりがみうた」の実践、美術科教育学会西地区会+感覚をつないでひらく芸術教育を考える会、2010年3月6日、兵庫県立美術館ギャラリー棟3Fギャラリー

〔図書〕(計4件)

- ①矢野真監修、『幼稚園・保育園の毎日のおりがみ』、成美堂出版、2008年、160頁
- ②小泉裕子・田川悦子・矢野真・富田久枝他10名、『幼稚園実習保育所実習のMind & Skill—実習力から実践力へ—』、学芸図書、2008年、188頁(145—156頁)
- ③矢野真、『保育園・幼稚園の絵画あそび完全マニュアル』、成美堂出版、2009年、160頁
- ④吉津晶子、『保育園・幼稚園のうたあそび完全マニュアル』、成美堂出版、2009年、160頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

矢野 真 (YANO MAKOTO)
京都女子大学・発達教育学部・准教授
研究者番号：00369472

(2)研究分担者

吉津 晶子 (YOSHIKAZU MASAKO)
熊本学園大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：60350568

(3)連携研究者

田爪 宏二 (TAZUME HIROTSUGU)
鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授
研究者番号：20310865